はじめに

由利本荘市は、沿岸域から山間部まで広大な面積を有し、様々な地域特性を持っています。そのため、想定される自然災害の種類も多く、それぞれの災害に応じた対策が必要になります。

この冊子は、洪水・土砂災害、地震・津波、火山噴火などの災害から市民のみなさんの生命、財産を守るために、災害の発生する恐れのある地域を明らかにし、避難基準・避難場所などを示すことで、日頃から災害に対する意識を高めていただくとともに、いざという時の行動が自主的に早期かつ安全でスムーズに行われることを目的に作成しました。

災害発生時には、インターネットやＳＮＳ上に、根拠のないデマや差別と偏見をあおる間違った情報が投稿されている可能性もあり得ます。真偽をよく確かめ冷静な行動を取りましょう。

また、災害時の避難所では、性別の違い、宗教の違い、障がいの有無、ＬＧＢＴＱ等の人や外国人など様々な方がおります。言葉や文化の違い、多様な生き方などをお互いに理解し合い、あらゆる人権に配慮しましょう。

ぜひ、この「わが家の防災マニュアル」を使ってご家族で話し合いの場を設け、さらには自主防災組織を中心に連携のとれた災害対策にご活用ください。

令和３年３月

※状況によっては危険想定区域外であっても被害が生じる可能性がありますので、十分注意してください。

目　次

索引図・使い方 ---------- 1
- ハザードマップ索引図
- ハザードマップの使い方

地域防災 ---------- 2
- 自助・共助・公助について

災害時要配慮者支援 ---------- 3
- 要配慮者と避難行動要支援者を地域で守ろう

避難時の心得 ---------- 4～5
- 警戒レベルと避難行動
- 避難行動判定フロー
- 非常用持ち出し品・備蓄品チェックリスト

地震・津波 ---------- 6～7
- 地震発生のメカニズム
- 震度と揺れ等の状況
- 地震対策
- 地震発生後の津波に注意

風水害 ---------- 8～9
- 水害発生のメカニズム
- 浸水深の目安
- 警報等の発表基準
- 浸水被害を防ぐためには
- 情報の伝達方法

土砂災害 ---------- 10～11
- 土砂災害の種類と特徴
- 土砂災害警戒区域・土砂災害特別警戒区域
- 土砂災害警戒判定メッシュ情報
- 土砂災害の予防策
- 土砂災害の避難ポイント

雪害 ---------- 12～13
- よくある除雪作業中の事故とその対策
- みんなで協力・助け合い
- 雪崩の種類
- こんな時は危険！

火災 ---------- 14～15
- 住宅防火７つのポイント
- 火災発生！初期対応の３原則
- 消火器の使い方を覚えておきましょう
- 火元別の消火方法
- 火災に対する備え

火山噴火 ---------- 16～17
- 火山活動に伴う主な被害
- こんなときは噴火の危険信号
- 噴火が始まったら
- 火山灰が降ってきたら
- 噴火警戒レベル

洪水・土砂災害マップ ---------- 18～43

浸水継続時間図 ---------- 44～47

津波浸水予測マップ ---------- 48～55

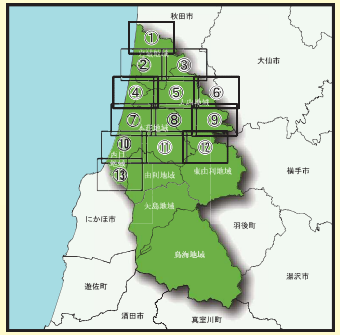
火山噴火災害予測マップ ---------- 56～59

資料集 ---------- 60～61
- 指定緊急避難場所
- 要配慮者利用施設
- 過去の水害
- 緊急時連絡先

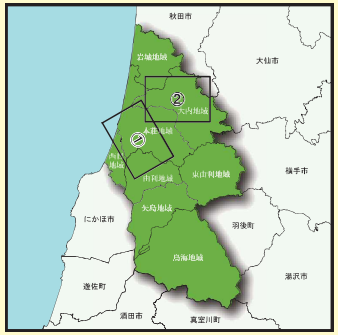
- わが家の防災メモ
- 災害用伝言サービス ---------- 裏表紙

ハザードマップ索引図

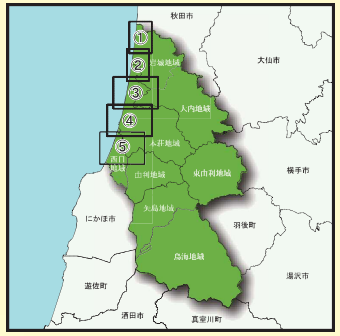
洪水・土砂災害マップ



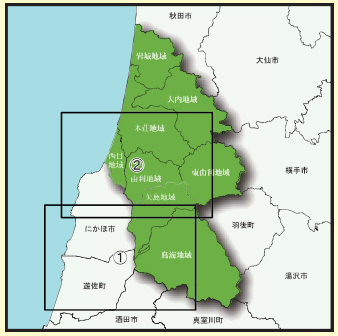
浸水継続時間図



津波浸水予測マップ



火山噴火災害予測マップ



ハザードマップの使い方

ステップ① 自宅の位置や避難場所を確認しましょう。

国道や県道の位置、学校や公共施設などの位置を参考に、自宅の位置や避難場所を確認しましょう。

ステップ② 町内会・自主防災組織等で一時避難場所を話し合いましょう。

災害が起こったときに、まず安全を確保するために避難する一時避難場所を、町内会や自主防災組織等で話し合いましょう。

ステップ③ 地震や大雨のときに危険になる場所を確認しましょう。

古い家屋やブロック塀など、地震のときに危険となる場所、自宅周辺にある水路・橋や土砂災害警戒区域など大雨の時に危険となる場所を確認しましょう。

ステップ④ 危険箇所を避けて、避難経路を設定しましょう。

地震や大雨の時に危険となる場所を避けて、避難経路を設定しましょう。

※地震と大雨の時では、避難ルートが違ってくる場合も考えられます。

ステップ⑤ 実際に避難経路を歩いてみて、安全か確認しましょう。

家庭や地域で話し合いながら、実際に歩いてみましょう。避難経路に危険な箇所がある場合には、避難経路を見直しましょう。

ステップ⑥ 災害時の対応を話し合いましょう。

自宅周辺の危険箇所、避難先、避難経路について家族やご近所の方と話し合いましょう。家族やご近所でこれらの情報を共有し、いざというときに協力し合うことが重要です。

ステップ⑦ 非常用持ち出し品や備蓄品を準備しましょう。

避難時の心得にある「非常用持ち出し品・備蓄品チェックリスト」の項を参考にして、避難するときに持ち出すものや備蓄しておくものを準備しましょう。

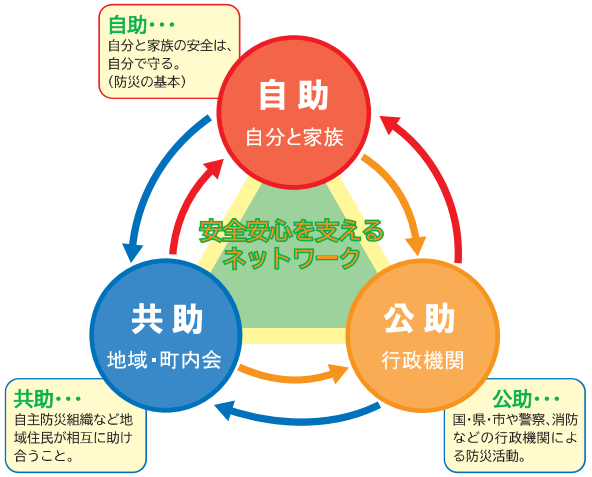
ステップ⑧ わが家の防災メモを記入しましょう。

普段から避難場所や指定避難所を確認して、裏表紙の集合場所に記入しましょう。
安否確認のために家族や知人、親戚等の連絡先を記入しておきましょう。

自助・共助・公助について

自助・共助・公助の輪

自助・共助・公助の連携が安全安心なまちを作ります。



自助　自分や家族で防災活動

1 家族一人ひとりの役割分担
ふだんから役割を決めておきましょう。

2 家屋の危険箇所チェック
家の内外の危険個所をチェックしておきましょう。

3 家具の安全な配置と転倒防止策
家具の安全な配置換えや、家具の転倒などを防ぐため、家具を固定しましょう。

4 非常用持ち出し品の準備
必要な品がそろっているかチェックするとともに、新しいものとの取り換えも忘れないようにしましょう。

5 避難場所や避難経路の確認
最寄の避難場所や避難するときの経路を確認しておきましょう。また、家族の集合場所を決めておきましょう。

6 緊急時の家族との連絡方法
家族が離ればなれになったときの連絡先や連絡方法を確認しておきましょう。

7 訓練への積極的な参加
市や自主防災組織が実施する防災訓練に参加しましょう。

共助　隣近所や地域での防災活動

1 隣近所や町内会での防災活動
一人ひとりが「自分たちのまちは自分たちで守る」という、「自主」、「自立」、「協働」の精神に基づいた防災活動を組織的に行うことが必要です。

2 自主防災組織に参加しよう
「災害時、隣近所の人と力を合わせ、防災活動を行う町内会等の集まり」が自主防災組織です。

3 平常時のコミュニケーション
近所にどんな人が住んでいるのか、家族構成など隣近所同士が地域のふれあい活動などを通してお互いに分かっていることが防災の第一歩につながります。

自主防災組織の活動例

平常時の活動

1 地域内の安全点検
- 地域内のパトロール
- 地域箇所の点検
- 地域防災マップの作成

2 防災知識の普及
- 啓発チラシの作成、配布
- 防災研修会などの開催

3 防災訓練の実施
- 初期消火、避難訓練
- 炊き出し訓練
- 応急手当訓練

災害時の活動

1 初期消火活動
消火器やバケツ等による初期消火を行う。

2 避難の誘導
住民を避難場所などの安全な場所へと誘導する。

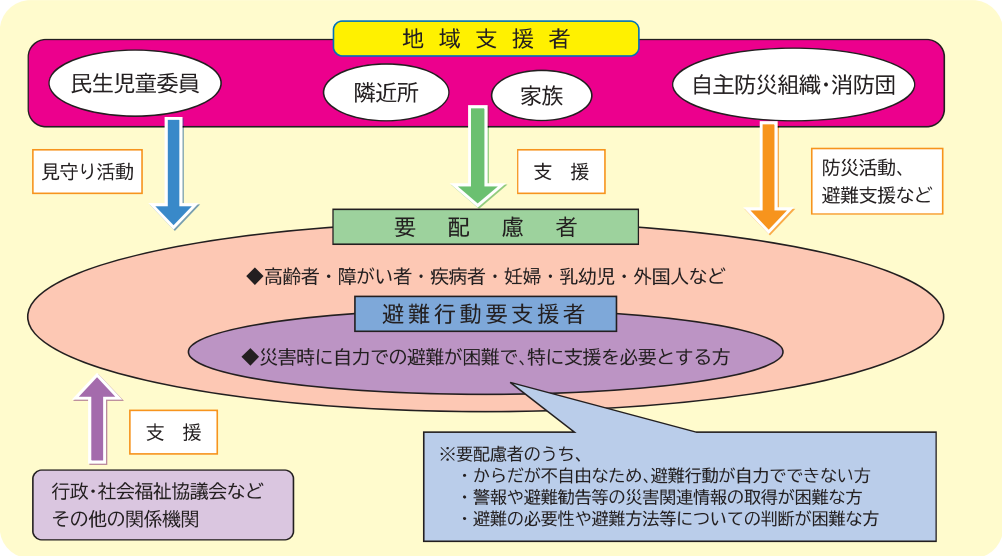
3 救出・救助
負傷者などを救出し、応急手当を行う。

4 情報の収集・伝達
行政機関と連絡を取り合い、情報を住民に伝える。

5 炊き出し等の活動
飲料水・食料などの配分、炊き出し等を行う。

要配慮者と避難行動要支援者を地域で守ろう

要配慮者とは、高齢者や障がい者、疾病者、妊婦、乳幼児、外国人の方々など、災害時に特に配慮が必要な人たちです。
また**避難行動要支援者**とは、自力での避難が困難で、特に支援を必要とする人たちです。
要配慮者や**避難行動要支援者**の安全は、地域住民の協力があってこそ確保できます。



要配慮者の支援を行う際は・・・

高齢者や疾病者

- 複数の人で対応する。
- 緊急のときはおぶって避難する

目の不自由な人

- つえを持つ手と反対側のひじのあたりに軽く触れるか、腕や肩をかして半歩くらい前をゆっくり進む。
- 階段などの障害物を説明しながら進む。

耳が不自由な人

- 口を大きく動かし、はっきりと話す。
- 身ぶりや筆談などで正確な情報を伝える。

車いすを利用している人

- 階段では２人以上で援助する。上りは前向き、下りは後ろ向きで移動する。
- 救援者が１人の場合はおぶいひもなどを利用し、おぶって避難する。

外国人

- 身ぶり手ぶりで話しかけ、孤立させないようにする。

妊産婦・小さな子どものいる人

- どのような手助けが必要か、まず聞いてみる。
- 乳幼児を連れた人や妊産婦を見かけたら付き添うように心がける。

外国人の方へ

Disaster Information

外国語（がいこくご）の
災害情報（さいがいじょうほう）

秋田県ホームページ
https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/43536

要配慮者を支援するときの心得

①相手を尊重する
援助だからといって、何でも押し付けをせず相手の立場を尊重しましょう。

②コミュニケーションをとる
相手の希望にそうことができるように、密なコミュニケーションをとることを心がけましょう。

③笑顔で接する
笑顔は安心につながり、不安な気持ちを取り除きます。

④プライバシーを守る
相手の立場を尊重し、要配慮者の秘密は絶対に守りましょう。

⑤出来ない支援や無理な約束はしない
無理な約束などをしないようにしましょう。事故などにつながります。

⑥医療行為はしない
骨折の手当てや止血、要配慮者からの指示に従って援助する。服薬を除き、薬を飲ませるなどの医療行為はしないように。医師などの専門家に相談しましょう。

警戒レベルと避難行動

警戒レベル	国・県・気象庁が発令 土砂災害に関する情報	国・県・気象庁が発令 洪水に関する情報	避難の情報（市が発令）	住民が取るべき行動
5	大雨特別警報(土砂災害)	氾濫発生情報 大雨特別警報(浸水害)	災害発生情報	命を守るための最善の行動
4	土砂災害警戒情報	氾濫危険情報	**避難勧告 避難指示(緊急)**	**全員退避 (対象地域)**
3	大雨警報(土砂災害)	氾濫警戒情報 洪水警報	**避難準備・ 高齢者等避難開始**	高齢者・要配慮者等は避難開始 それ以外の人も避難準備を始め 自発的に避難する
2	大雨注意報	氾濫注意情報 洪水注意報	―	避難に備え、避難所への道 や持ち出し品を確認する
1	早期注意情報 (警報級の可能性)	―	―	災害への心構えを高める

避難行動判定フロー

あなたがとるべき避難行動は？

ハザードマップで自分の家がどこにあるか確認し、印をつけてみましょう。

スタート

家がある場所に色が塗られていますか？

いいえ → 色が塗られていなくても、周りと比べて低い土地や崖のそばなどにお住まいの方は、市からの避難情報を参考に必要に応じて避難してください。

はい

浸水・土砂災害の危険があるので、原則として自宅の外に避難が必要です。

例外 → ※洪水の危険があっても・・・
①洪水により家屋が倒壊又は崩落してしまうおそれの高い区域の外側である。
②浸水する深さよりも高いところにいる。
③浸水しても水がひくまで我慢できる。水・食料などの備えが十分にある場合は、自宅に留まり安全確保をすることも可能です。
※土砂災害の危険があっても、十分堅牢なマンション等の上層階に住んでいる場合は自宅に留まり安全確保をすることも可能です。

ご自身または一緒に避難する方は避難に時間がかかりますか？

はい

安全な場所に住んでいて身を寄せられる親戚や知人はいますか？

- **はい** → 警戒レベル３が出たら、安全な親戚や知人宅に避難しましょう（日頃から相談しておきましょう）
- **いいえ** → 警戒レベル３が出たら、市町村が指定している指定緊急避難場所に避難しましょう

いいえ

安全な場所に住んでいて身を寄せられる親戚や知人はいますか？

- **はい** → 警戒レベル４が出たら、安全な親戚や知人宅に避難しましょう（日頃から相談しておきましょう）
- **いいえ** → 警戒レベル４が出たら、市町村が指定している指定緊急避難場所に避難しましょう

必ず取り組みましょう

※ハザードマップは浸水や土砂災害が発生するおそれの高い区域を着色した地図です。着色されていないところでも災害がおこる可能性があります。

非常用持ち出し品・備蓄品チェックリスト

災害後の救助や救援物資の到着までに、最低限必要なものは準備しておきましょう。

Point
- ●非常用持ち出し品は、両手が使えるリュックタイプの袋などにまとめておきましょう。
- ●避難の妨げにならないように、軽くコンパクトにまとめましょう。
- ●自分や家族の状況に応じて必要なものを選びましょう。
- ●自分に必要なものの優先順位を決めて準備しましょう。
- ●定期的に中身をチェックしましょう。

非常用持ち出し品　避難の際に持ち出すもの！

- □ 水
- □ 非常食
- □ 防災用ヘルメット・防災ずきん
- □ 衣類・下着
- □ レインウェア
- □ 懐中電灯（※手動充電式が便利）
- □ 携帯ラジオ（※手動充電式が便利）
- □ 予備電池・携帯充電器
- □ 救急用品
  （ばんそうこう、包帯、消毒液、常備薬など）
- □ 使い捨てカイロ
- □ ブランケット
- □ 軍手
- □ 洗面用具
- □ 歯ブラシ・歯磨き粉
- □ タオル
- □ ペン・ノート

感染症対策にも有効です!!

- □ マスク
- □ 手指消毒用アルコール
- □ 石けん・ハンドソープ
- □ ウェットティッシュ
- □ 体温計

一緒に持ち出そう!!

- □ 貴重品
  （通帳、現金、パスポート、運転免許証、病院の診察券、マイナンバーカードなど）

子供がいる家庭の備え

- □ 粉ミルク・液体ミルク
- □ 使い捨て哺乳瓶
- □ 離乳食
- □ 携帯カトラリー
- □ 子供用紙おむつ
- □ お尻ふき
- □ 携帯用お尻洗浄機
- □ ネックライト
- □ 抱っこひも
- □ 子供の靴
- □ 紙のよだれかけ
- □ 汚物袋

女性の備え

- □ 生理用品
- □ おりものシート
- □ サニタリーショーツ
- □ 中身の見えないごみ袋
- □ 防犯ブザー／ホイッスル

高齢者がいる家庭の備え

- □ 大人用紙パンツ
- □ 杖
- □ 補聴器
- □ 入れ歯
- □ 入れ歯用洗浄剤
- □ 男性用吸水パッド
- □ デリケートゾーンの洗浄剤
- □ 持病の薬
- □ お薬手帳のコピー

備　蓄　品　家に備えておくもの！

ローリングストック

- □ 食料品や水（最低３日分）×家族分
  保存期間の長いものを多めに買っておき、消費したら補填するという習慣にしていれば常に食料の備蓄が可能！
- □ 生活用品
  例えば、ティッシュ、トイレットペーパー、ラップ、ゴミ袋、ポリタンク、携帯用トイレ・・・など

ローリングストックとは？

普段から少し多めに食材、加工品を買っておき、使ったら使った分だけ新しく買い足していくことで、常に一定量の食料を家に備蓄しておく方法をローリングストックと言います。

保存食を備蓄しておくことも、もちろん大切なことではありますが、日常の中に食料備蓄を取り込むという考え方もあります。ポイントは、日常生活で消費しながら備蓄することです。

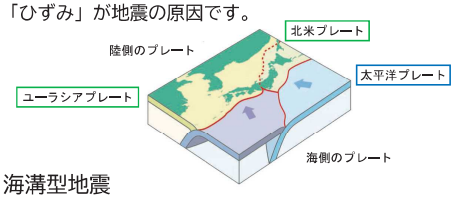
食料等を一定量に保ちながら、消費と購入を繰り返すことで、備蓄品の鮮度を保ち、いざという時にも日常生活に近い食生活を送ることができるはずです。

地震発生のメカニズム

地震発生のしくみ

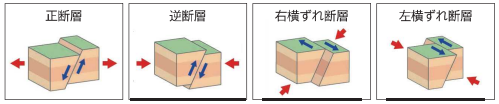
※プレートの境界や周辺で生じる「ひずみ」が地震の原因です。

地球の表面は「プレート」と呼ばれる十数枚の固い岩盤で覆われ、それが１年に数センチ程の速さで一定の方向に動いています。
プレートがぶつかり合うところでは、伸び縮みなどのひずみが生じます。
そのひずみが地震を引き起こす原因です。日本では主に、２種類の地震が起こっています。



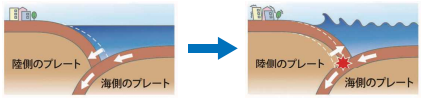
活断層型地震

地下の地盤に押す力や引っ張る力が加わることで、ひずみのエネルギーが蓄積され、それが限界に達したときに、ある断層面を境に地盤がずれ動き、地震が発生します。



海溝型地震

海側のプレートが陸側のプレートの下にもぐりこむことで、境界にひずみのエネルギーが蓄積され、それが限界に達したときにプレートがもとにもどろうとしてはね上がり、地震が発生します。



震度と揺れ等の状況

1

［震度１］
- 屋内で静かにしている人の中には揺れをわずかに感じる人がいる。

2

［震度２］
- 屋内で静かにしている人の大半が揺れを感じる。

3

［震度３］
- 屋内にいる人のほとんどが揺れを感じる。

4

［震度４］
- ほとんどの人が驚く。
- 電灯などのつり下げ物は大きく揺れる。
- 座りの悪い置物が揺れることがある。

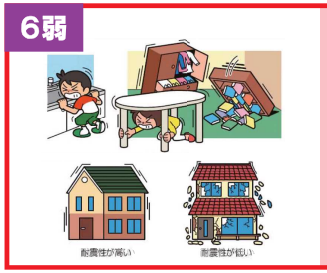
5弱

［震度５弱］
- 大半の人が恐怖を覚え、物につかまりたいと感じる。
- 棚にある食器類や本が落ちることがある。
- 固定していない家具が移動することがあり、不安定なものは倒れることがある。

5強

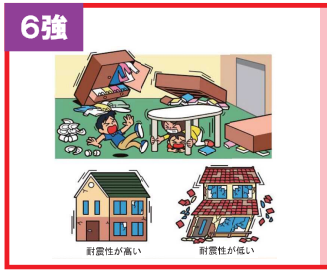
［震度５強］
- 物につかまらないと歩くことが難しい。
- 棚にある食器類や本で落ちるものが多くなる。
- 固定していない家具が倒れることがある。
- 補強されていないブロック塀が倒れることがある。

6弱



［震度６弱］
- 立っていることが困難になる。
- 固定していない家具の大半が移動し、倒れるものもある。ドアが開かなくなることがある。
- 壁のタイルや窓ガラスが破損、落下することがある。
- 耐震性の低い木造建物は、瓦が落下したり、建物が傾いたりすることがある。倒れるものもある。

6強



［震度６強］
- はわないと動くことができない。飛ばされることもある。
- 固定していない家具のほとんどが移動し、倒れるものが多くなる。
- 耐震性の低い木造建物は、傾くものや、倒れるものが多くなる。
- 大きな地割れが生じたり、大規模な地すべりや山体の崩壊が発生することがある。

7

［震度７］
- 耐震性の低い木造建物は、傾くものや倒れるものがさらに多くなる。
- 耐震性の高い木造建物でも、まれに傾くことがある。
- 耐震性の低い鉄筋コンクリート造の建物では、倒れるものが多くなる

地震対策

家の中の安全対策

家具類の転倒・落下防止をしておこう
- 家具やテレビ・パソコンなどを固定し、転倒や落下防止措置をしておく。
- 重いものや割れやすいものは、高い場所におかない。

安全な空間をつくっておこう
- 寝室、子供やお年寄りの部屋は、優先して転倒防止金具で固定する。
- 玄関などの出入り口までの通路に、家具や倒れやすいものを置かない。

ケガの防止対策をしておこう
- 食器棚や窓ガラスには、飛散防止用フィルムを貼る。
- 避難に備えてスリッパやスニーカーを準備しておく。

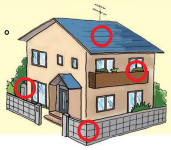
家の周辺の安全対策

屋根
- 不安定な屋根のアンテナや屋根瓦は補修しておく。

ブロック塀・門柱
- 耐震性をチェックし、必要に応じて補修する。

ベランダ
- 植木鉢などの整理整頓を。落ちやすい場所には物を置かない。

プロパンガス
- ボンベを鎖などでしっかり固定しておく。



グラッときたら

まず身の安全
- まず身を守り、揺れがおさまるまで様子を見る。

慌てた行動ケガのもと
- 転倒や落下した家具類、ガラスの破片などに注意する。

落下物に注意
- 屋外では、瓦、窓ガラス、看板などが落ちてくるので注意する。
- 屋内にいるときは、慌てて外に飛び出さない。

門や塀には近寄らない
- 野外で揺れを感じたら、ブロック塀などに近寄らない。

揺れがおさまったら

落ち着いて火の元確認、初期消火
- 火を使っているときは、揺れがおさまってから慌てずに火の始末をする。
- 出火したときは落ち着いて消火する。

門や戸を開け出口確保
- 揺れがおさまったら避難できるよう出口を確保する。

地震後の行動

正しい情報　確かな行動
- ラジオやテレビ、市役所や消防署などから正しい情報を得る。

確かめ合おう　隣近所の安否
- わが家の安全を確認後、隣近所の安否を確認する。

避難の前に安全確認　電気・ガス
- 避難が必要なときには、ブレーカーを切り、ガスの元栓を締めて避難する。

地震発生後の津波に注意

津波警報・注意報の種類

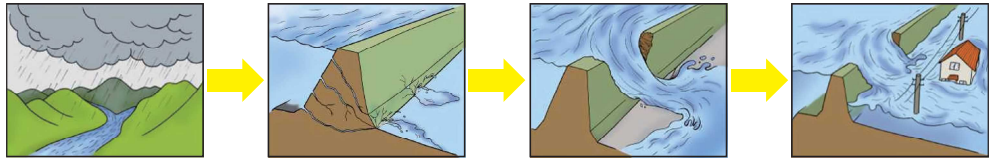
種類	発表基準	発表される津波の高さ：数値での発表（津波の高さ予想の区分）	発表される津波の高さ：巨大地震の場合の発表	想定される被害と取るべき行動
大津波警報	予想される津波の高さが高いところで３mを超える場合	10m超（10m＜予想高さ）	巨大	木造家屋が全壊・流出し、人は津波による流れに巻き込まれます。 **沿岸部や川沿いにいる人は、ただちに高台や避難ビルなど安全な場所へ避難してください。**
		10m（5m＜予想高さ≦10m）		
		5m（3m＜予想高さ≦5m）		
津波警報	予想される津波の高さが高いところで１mを超え、３m以下の場合	3m（1m＜予想高さ≦3m）	高い	標高の低いところでは津波が襲い、浸水被害が発生します。人は津波による流れに巻き込まれます。 **沿岸部や川沿いにいる人は、ただちに高台や避難ビルなど安全な場所へ避難してください。**
津波注意報	予想される津波の高さが高いところで０．２m以上、１m以下であって、津波による災害の恐れがある場合	1m（0.2m≦予想高さ≦１m）	－	海の中では人は早い流れに巻き込まれ、また、養殖いかだが流出し、小型船舶が転覆します。 **海にいる人はただちに海から上がって、海岸から離れて下さい。**

津波警報・注意報と避難のポイント

- 震源が陸地に近いと津波警報・注意報が津波の襲来に間に合わないことがあります。強い揺れや弱くても長い揺れを感じたときは、すぐに避難を開始しましょう。
- 津波の高さを「巨大」と予想する大津波警報が発表された場合は、東日本大震災のような巨大な津波が襲う恐れがあります。ただちにできる限りの避難をしましょう。
- 津波は沿岸の地形等の影響により、局所的に予想より高くなる場合があります。ここなら安心と思わず、より高い場所を目指して避難しましょう。
- 津波は長い時間繰り返し襲ってきます。津波警報・注意報が解除されるまでは、避難を続けましょう。

水害発生のメカニズム

洪　水



大雨によって川の水が増え、水かさが上がり始めます。

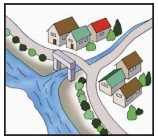
堤防いっぱいまで水が増えると、堤防に水の圧力がかかり始めます。

水が増え、水の力に堤防が耐えられなくなり、堤防の一部が崩れ始めます。

崩れた場所は一気に広がり、勢いよく水が流れ出し、家などに襲いかかります。

内　水

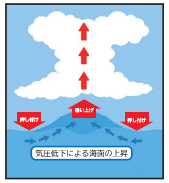
下水道の排水能力を超える雨が降った場合に、下水道から水があふれたり、下水道に入りきれないで地上に溜まったままになったりします。



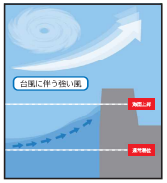
街などに降った雨は、下水道などを通って川に排水されます。

大雨が降ると川の水位が上がり、排水されにくくなり、下水道などがあふれてしまいます。

高　潮

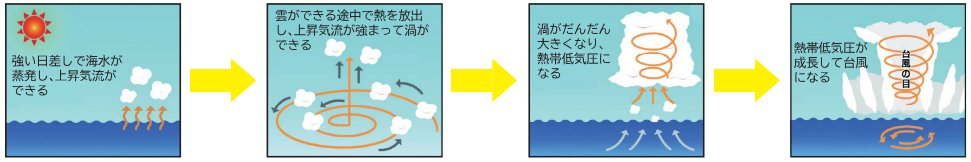


低気圧による海面の吸い上げ

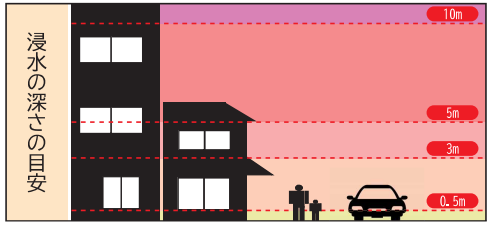


風による吹き寄せ

台風発生メカニズム



浸水深の目安



浸水深	浸水程度の目安
0～0.5m	床下まで浸水する。（大人の膝までつかる）
0.5～3.0m	1階の軒下まで浸水する。
3.0～5.0m	2階の軒下まで浸水する。
5.0m～	2階の屋根以上が浸水する。

浸水深	自動車走行
0～10cm	走行に関し、問題はない。
10～30cm	ブレーキ性能が低下し、安全な場所に移動させる必要がある。
30～50cm	エンジンが停止し、車から退出を図らなければならない。
50cm～	車が浮き、またパワーウィンドウ付きの車では車の中に閉じ込められてしまい、車とともに流され非常に危険な状態となる。

※車両形状や設計によって異なります。冠水した道路には安易に侵入しないようにしましょう。

自宅の構造	浸水の深さ ～0.5m	0.5m～3.0m	3.0m～5.0m	5.0m～
2階建て	屋内安全確保も可	屋内安全確保（2階以上）も可	避難先へ避難	避難先へ避難
1階建て		避難先へ避難	避難先へ避難	避難先へ避難

早期の立退き避難が必要です！

氾濫流

家屋倒壊等氾濫想定区域

堤防の決壊等が発生した場合に、家屋の倒壊等の危険性がある区域です。

マップ表記

河岸侵食

家屋倒壊等氾濫想定区域

河岸が浸食された場合に、家屋の倒壊等の危険性がある区域です。

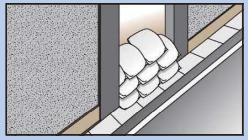
マップ表記

警報等の発表基準

警報の種類	警報等の発表基準	求められる行動
特別警報（大雨）	数十年に一度の大雨により、重大な災害が起こるおそれが著しく大きいと予想される場合	・災害がすでに発生している可能性が極めて高い状況です。命を守るための最善の行動をとってください。 ・外出が危険な場合は、家の中で少しでも安全な場所に移動してください。
警報（大雨・洪水）	重大な災害が起こるおそれがあると予想される場合	・自治体からの情報に注意し、速やかな避難ができるように準備しましょう。 ・被災のおそれがある場合は速やかに自主避難しましょう。
注意報（大雨・洪水）	災害が起こるおそれがあると予想される場合	・避難に備え、避難所への道や持ち出し品の確認をしましょう。 ・テレビ・ラジオの情報に注意しましょう。
記録的短時間大雨情報	大雨警報発表中に、数年に１回程度しか起こらないような１時間に１００ミリ前後の猛烈な雨が観測された場合	
土砂災害警戒情報	大雨警報発表中に、命に危険を及ぼす土砂災害がいつ発生してもおかしくない状況となった場合	

浸水被害を防ぐためには

土のう

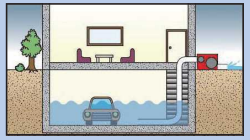


出入り口に土のうを置き、雨水の侵入を防ぎます。

止水板

出入り口に長めの板などを使い浸水を防ぎます。

地下室への排水ポンプの設置



地下駐車場、半地下住宅では、排水ポンプを設置し、浸水に備えましょう。

側溝や雨水ますの集水口の確認

道路の側溝や雨水ますの集水口（グレーチング）に落ち葉などが詰まっていないか確認しましょう。詰まっていたら取り除いておきましょう。

情報の伝達方法

災害時には、正確な情報を速やかに入手することが大切です。

インターネットや携帯電話で防災関連情報を確認できます。

由利本荘市役所 https://www.city.yurihonjo.lg.jp/	**秋田県防災ポータルサイト** https://www.bousai-akita.jp/
秋田地方気象台 https://www.jma-net.go.jp/akita/	**国土交通省「川の防災情報」** https://www.river.go.jp/

土砂災害の種類と特徴

土石流

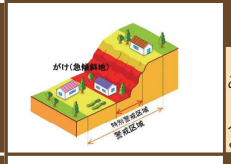
Point 猛スピードでやってきます

山腹や川底の石、土砂が長雨や集中豪雨などによって一気に下流へと押し流される現象です。
時速20～40kmという速度で一瞬のうちに人家や畑などを壊滅させてしまいます。

前兆現象

- ●山鳴りがする
- ●雨が降り続いているのに、川の水位が下がる
- ●川が濁ったり、流木が流れる

がけ崩れ



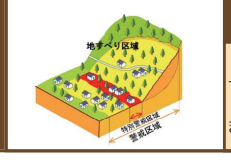
Point 一瞬にして崩壊します

斜面の地表に近い部分が、雨水の浸透や地震等でゆるみ、突然崩れ落ちる現象です。
崩れ始めてから、崩れ落ちるまでの時間がごく短く、人家の近くで起きると逃げ遅れる人も多く、人命を奪うことの多い災害です。

前兆現象

- ●がけの上から小石がパラパラと落ちてくる
- ●斜面に亀裂ができる
- ●斜面から水が湧き出す

地すべり



Point 広い範囲に被害が及びます

斜面の一部あるいは全部が地下水の影響と重力によってゆっくりと斜面下方に移動する現象です。
移動する土塊の量が大きいため、甚大な被害を及ぼします。

前兆現象

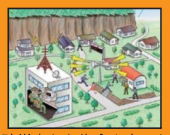
- ●地面にひび割れができる
- ●地面の一部が陥没したり、隆起したりする
- ●池や沼の水かさが急に変わる
- ●沢や井戸の水が濁る

土砂災害警戒区域・土砂災害特別警戒区域

土砂災害警戒区域(イエローゾーン)	土砂災害が発生する恐れがあり、発生した場合住民に危害が生じる恐れがある区域
土砂災害特別警戒区域(レッドゾーン)	土砂災害警戒区域のうち、土砂災害が発生した場合に建築物に損壊が生じ、住民に著しい危害が生じる恐れがある区域

土砂災害警戒区域では

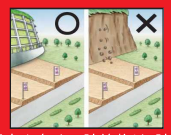
警戒避難体制の整備



土砂災害から生命を守るため、災害情報の伝達や避難が速くできるように地域防災計画に定められ、警戒避難体制の整備が図られます。

土砂災害特別警戒区域では

建築物の構造規制



居室を有する建築物は、建築確認の制度が適用され、作用すると想定される衝撃等に対して建築物の構造が安全であるかどうか建築確認がされます。

特定開発行為に対する許可制

住宅宅地分譲や災害時要配慮者関連施設の建築のための行為は、基準に従ったものに限って許可されます。

建築物の移転等の勧告

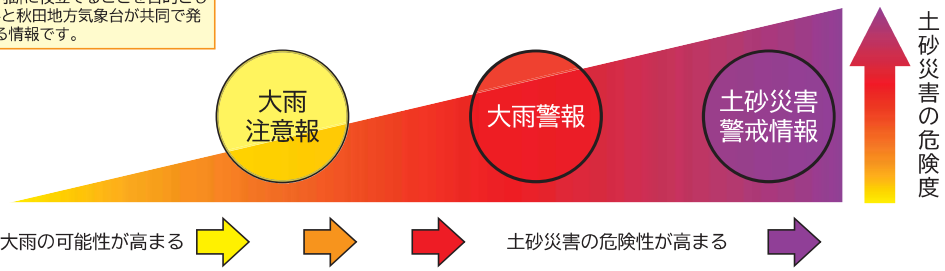
著しい損壊が生じるおそれのある建築物の所有者等に対し、移転等の勧告が図られます。
移転等については、住宅金融支援機構の融資等の支援を受けられます。

●土砂災害警戒情報とは

大雨による土砂災害発生の危険性が高まった時に、市が防災活動や住民等へ避難勧告を含む避難情報等の発令を適時適切に行えるように支援すること、また住民の自主避難の判断に役立てることを目的として、県と秋田地方気象台が共同で発表する情報です。

●避難情報等の発令を検討

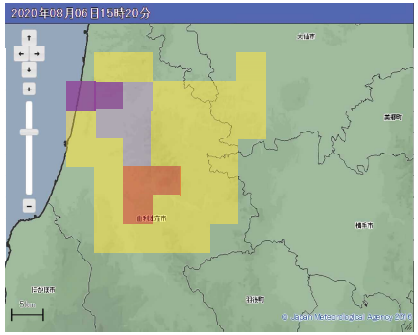
土砂災害警戒情報の発表を受けて、市は気象状況の前兆現象や、土砂災害警戒区域等マップ(県補足情報)、土砂災害警戒判定メッシュ情報(気象庁補足情報)の危険度指数を総合的に判断し、住民に対して避難勧告等の避難情報を発令します。住民へは防災行政無線や緊急速報メール(エリアメール)等を活用し、速やかに伝達します。



土砂災害警戒判定メッシュ情報

土砂災害の危険度の高まりを、地図上の５段階で色分け表示しています。
避難にかかる時間等を考慮して、２時間先までの予測値を用いており(10分ごとの更新)、大雨警報(土砂災害)、土砂災害警報情報、記録的短時間大雨情報等が発表されたときに、どこで危険度が高まっているかを把握することができます。

土砂災害警戒判定メッシュ情報



色が持つ意味	説明	市から発令される避難情報（目安）
極めて危険	過去の重大な土砂災害発生時に匹敵する状況。命に危険が及ぶ土砂災害がすでに発生していてもおかしくない。この状況になる前に避難を完了しておく。	避難指示（緊急）
非常に危険	命に危険が及ぶ土砂災害がいつ発生してもおかしくない非常に危険な状況。遅くともこの時点で速やかに避難を開始する。	避難勧告
警戒（警報級）	土砂災害への警戒が必要。避難の準備を整え、早めの行動を心がける。高齢者等は速やかに避難を開始する。	避難準備・高齢者等避難開始
注意（注意報級）	土砂災害への注意が必要。今後の情報や周囲の状況、雨の降り方に注意する。	
今後の情報等に留意	今後の情報や周囲の状況、雨の降り方に注意する。	

「極めて危険」（濃い紫色）が出現すると、命が奪われるような土砂災害がすでに発生していてもおかしくない状況となります。
このため、高齢者は遅くとも「警戒」（赤色）が出現した時点で、一般の方は「非常に危険」（薄い紫色）が出現した時点で、土砂災害警戒区域外の少しでも安全な場所へ速やかに避難することが非常に重要です。
また、このメッシュ情報に関わらず、市から避難情報が発令された場合は速やかに避難してください。

土砂災害の予防策

日頃から避難する場所や道路などを確認しておきましょう。
家の近くにがけのある方は、がけの周辺を見回り、次のようなことを心がけましょう。

土砂災害時の避難ポイント

がけ崩れの恐れがある場合

一般的にがけ崩れの土砂は、地面が平らなところはがけの高さの２倍の距離まで到達するといわれています。避難する場合はがけから**できるだけ遠く**に逃げてください。

● 屋外に避難する場合

避難の際には、他の土砂災害の危険があるところはできるだけ避けましょう。

土石流の恐れがある場合

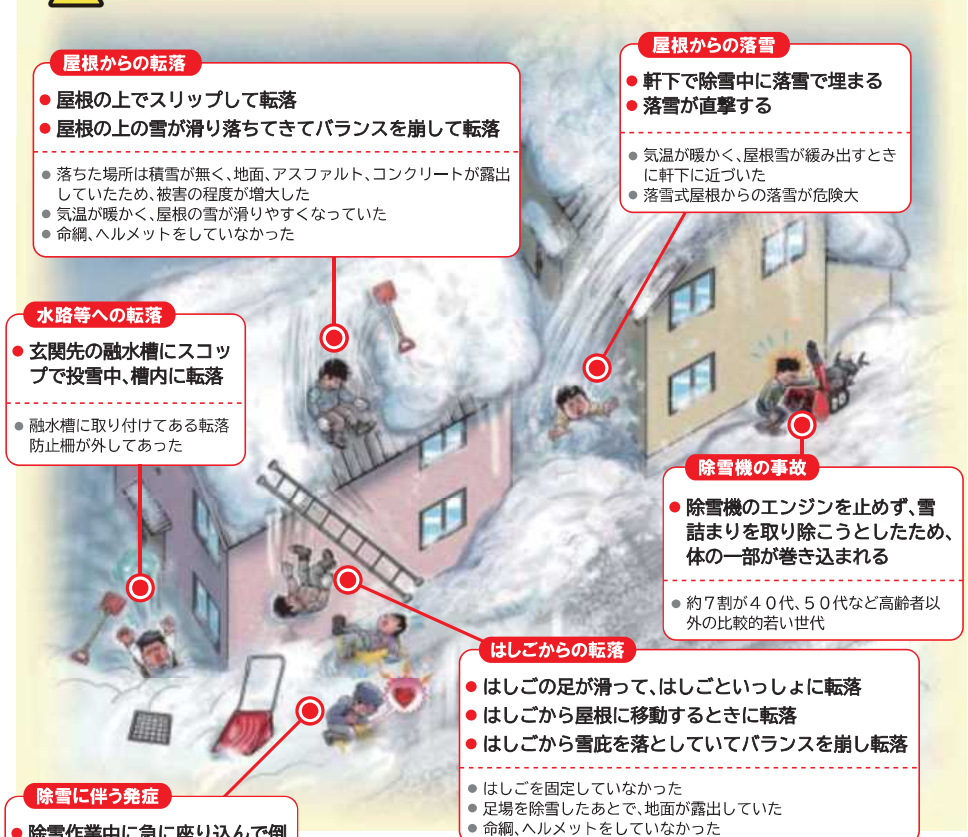
渓流沿いの低い土地から離れてください。土石流のスピードはとても速いので、土石流を見たら、**流れと直角方向**に逃げましょう

● 屋外に避難する場合

屋外に出ることがかえって危険な場合は、２階以上の斜面から離れた部屋で安全を確保してください。

よくある除雪作業中の事故とその対策

除雪中の事故はこんなケース、こんな原因で起きています。



屋根からの転落

- 屋根の上でスリップして転落
- 屋根の上の雪が滑り落ちてきてバランスを崩して転落

- 落ちた場所は積雪が無く、地面、アスファルト、コンクリートが露出していたため、被害の程度が増大した
- 気温が暖かく、屋根の雪が滑りやすくなっていた
- 命綱、ヘルメットをしていなかった

屋根からの落雪

- 軒下で除雪中に落雪で埋まる
- 落雪が直撃する

- 気温が暖かく、屋根雪が緩み出すときに軒下に近づいた
- 落雪式屋根からの落雪が危険大

水路等への転落

- 玄関先の融水槽にスコップで投雪中、槽内に転落

- 融水槽に取り付けてある転落防止柵が外してあった

除雪機の事故

- 除雪機のエンジンを止めず、雪詰まりを取り除こうとしたため、体の一部が巻き込まれる

- 約７割が４０代、５０代など高齢者以外の比較的若い世代

はしごからの転落

- はしごの足が滑って、はしごといっしょに転落
- はしごから屋根に移動するときに転落
- はしごから雪庇を落としていてバランスを崩し転落

- はしごを固定していなかった
- 足場を除雪したあとで、地面が露出していた
- 命綱、ヘルメットをしていなかった

除雪に伴う発症

- 除雪作業中に急に座り込んで倒れ(心肺停止)、救急搬送される

- 体調などに無理や油断があった

思い当たりませんか？

除雪作業に対する慣れや過信、油断が事故を招いています。

- 「雪下ろしには慣れている」という過信や油断はありませんか？
- 自分の年齢や体力に対する過信はありませんか？

除雪中の事故防止のための10か条

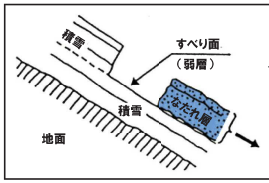
1. 作業は家族、となり近所にも声掛けて２人以上で！
2. 低い屋根でも油断は禁物！
3. 建物のまわりに雪を残して雪下ろし！
4. 作業開始直後と疲れたころは特に慎重に！
5. 晴れの日ほど要注意、屋根の雪がゆるんでる！
6. 忘れずに！命綱とヘルメット
7. はしごの固定を忘れずに！
8. 雪道具はこまめに手入れ、点検を！
9. エンジンを切ってから！除雪機の雪詰まりの取り除き
10. 携帯電話の携行を忘れずに！

みんなで協力・助け合い

1. **地域コミュニティの共助による雪処理活動を行う仕組みをつくりましょう。**
   日時を決めて、近隣どうし、地域が一斉に除雪作業を行いましょう。
2. **近隣、地域で日頃からの見守りや声かけをしましょう。**
   日頃から除雪作業をしている人に声をかけたり、１人で作業している人に注意しましょう。
3. **地域内外の雪処理の担い手による協力が必要です。**
   地域内外から雪処理の担い手を受け入れるための仕組みをつくりましょう。

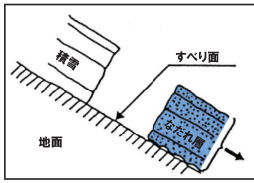
雪崩の種類

雪崩は、すべり面の違いによって表層雪崩と全層雪崩に分けられています。



表層雪崩

すべり面が積雪内部にある。



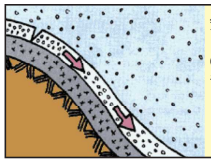
全層雪崩

すべり面が地面にある。

こんなときは危険！

■ 表層雪崩の発生しやすい条件

急傾斜の斜面に発生しやすく、特に雪庇や吹きだまりができている斜面に多発します。



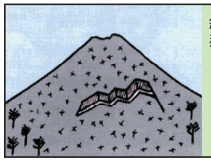
気温の低い時、既にかなりの積雪の上に、短時間に多量の降雪があった場合。

１月から２月にかけて多く発生します。

■ 全層雪崩の発生しやすい条件

過去に雪崩が発生した斜面や山腹傾斜地。

気温が上昇する春先、降雨後やフェーン現象等で気温が上昇したとき。



斜面に積雪の亀裂が発生しているとき。

気を付けて!!
雪崩の危険信号です!!

降雪や降雨の後、天気が良く気温が上がったとき

気温が低く古い雪の上に多量の新雪がつもったとき

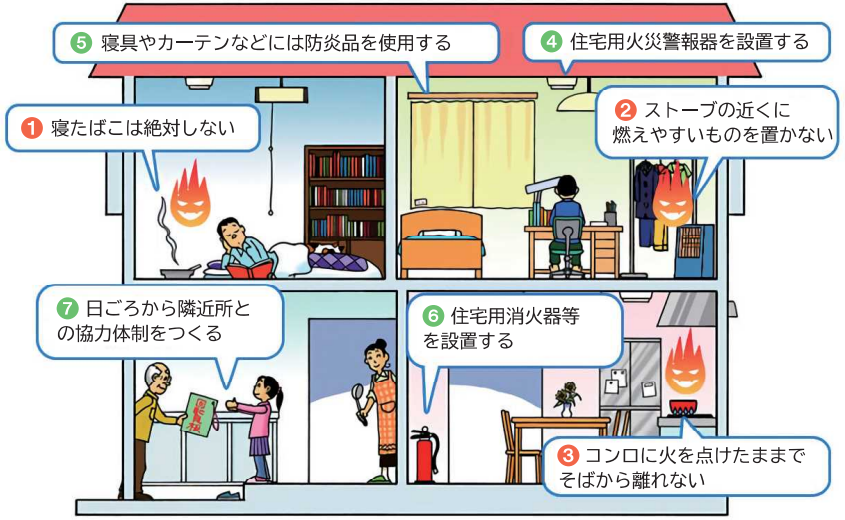
住宅防火７つのポイント

3つの習慣 火災の発生を防ぐために！

1. 寝たばこは絶対しない
2. ストーブの近くに燃えやすいものを置かない
3. コンロに火をつけたままでそばから離れない

4つの対策 被害を抑え人命を守るために！

4. 逃げ遅れを防ぐために、「住宅用火災警報器」を設置する
5. 寝具やカーテンなどには防炎品を使用する
6. 火災を小さいうちに消すために、住宅用消火器等を設置する
7. 日ごろから隣近所との協力体制をつくる



火災発生！初期対応の３原則

出火に居合わせたら、「通報」「初期消火」「避難」の順に行動することが基本です。しかし、状況によっては優先順位が異なりますので、逃げ遅れないように冷静な判断を心掛けましょう。

行動1 早く知らせる！
- 大きな声で「火事だー！」と叫び、隣近所に知らせる。声が出ない場合は、非常ベルを鳴らすか、やかんや鍋など音の出るものをたたくなどして異常を知らせる。
- どんなに小さな火事でも必ず**119番**に通報する。

行動2 早く消す！
- 火がまだ横に広がっているうちは消火が可能。
- 消火器や水だけでなく、座布団や毛布など手近なものを利用する。

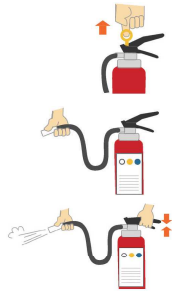
行動3 早く逃げる！
- 天井まで火が燃え広がったら消火は困難。無理せず早めに避難する。
- 可能ならば、燃えている部屋の窓やドアを閉め、空気を遮断してから避難する。

消火器の使い方を覚えておきましょう

■消火器の取り扱い訓練のときは、積極的に参加して体験しましょう。

■消火器の使い方

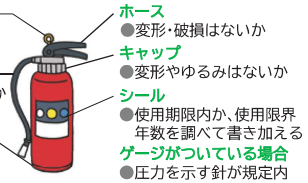
1. 安全ピンに指をかけ、上に引き抜く。
2. ホースをはずして火元に向ける。
3. レバーを強く握って噴射する。



■消火器の構え方

1. 火の風上にまわり、風上から構える。
2. やや腰を落として、低く構える。
3. 熱や煙を避け、炎には真正面から向き合わない。
4. 炎を狙うのではなく、火の根元を掃くように左右に振る。

■消火器は定期的に点検を！



火元別の消火方法

■コンロ
- 油鍋に水をかけるのは厳禁。
- 消火器を離れた位置から、鍋の全面を覆うように向けて噴射する。
- 消火器がない場合は、シーツやバスタオルをぬらして手前からすべらせるようにかぶせ、空気を遮断する。

■ストーブ
- 消火器は直接火元に向けて噴射する。
- 消火器がない場合は、シーツや毛布などをぬらして手前からすべらせるようにかぶせ、空気を遮断する。

■カーテン・ふすま・障子
- カーテンは燃え広がる前に水をかける。できればレールからひきちぎり消火する。
- ふすまや障子などはけり倒して、踏み消す。その後、水をかけてしっかり消火する。

■たばこ
- 寝たばこなどにより、毛布などの綿製品が焦げた場合は、消したつもりでも見えないところに火種が残り、再び燃えだすことがあるので、浴槽などにつけ完全に消す。

■衣類
- 着衣に火がついたら、転げまわって火を消す。
- 風呂場に残り湯があれば、浴槽に飛び込む。

■電気器具
- いきなり水をかけると感電の危険があるので、コンセントを抜くか、ブレーカーを切り、消火器で消火する。

■たき火
- 消火器を使う。消火器がない場合は水や土で消す。
- 水の準備ができていない場合は、ほうきや木の枝でたたいて消し、その後、水でしっかり消火する。

逃げるタイミングは天井への延焼！

避難する目安は天井まで火が燃え移ったとき。火が天井に燃え移るまでの間は初期消火に努めますが、もし炎が天井に燃え移ったら、けっして自分で消火しようとせず、迷わずすぐに避難してください。

防災 チェックポイント

本当に恐ろしいのは煙です。

火災で発生する煙には、一酸化炭素などの有毒ガスが含まれています。吸い込むと中毒などにより命を落とす危険性があるので、次のポイントに気をつけながら避難しましょう。

- ぬらしたタオルやハンカチなどで口と鼻を覆う。無理な場合は、ネクタイや衣類で代用する。
- 短い距離なら息を止め、一気に走り抜ける。
- できるだけ姿勢を低くする。
- 視界が悪いときは壁づたいに避難する。

火災に対する備え

ほとんどの火災は、わたしたちが注意することで防ぐことができます。火災を防ぐためのポイントをきちんと学び、日ごろからみんなで注意し合うようにしましょう。

1 放火対策を万全に

ゴミは指定日の朝に出すなど家のまわりに燃えやすいものを置かない。車庫、物置などの戸締りも忘れずにする。

2 コンロから離れない

コンロのまわりに燃えやすいものを置かない。火がついているコンロから離れるときは、必ず消すこと。

3 寝たばこ、ポイ捨ては厳禁

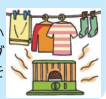
火がついたたばこを放置しない。喫煙するときには深い灰皿を使い、吸殻を捨てるときには必ず水につける。

4 子供の火遊びに注意

子供には火の安全な扱い方や怖さを教える。子供の手の届くところにマッチやライターを置かない。

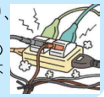
5 ストーブのまわりを整理

衣類や布団など、ストーブのまわりに燃えるものを置かない。家具のそばにストーブをおかない。近くで洗濯物を乾かすのも危険。



6 配線まわりはきれいに

複数のコードをまとめたり、たこ足配線をしたりしない。コードの上にものを載せるのも危険。コンセントまわりは定期的に掃除する。



7 風が強い日にたき火はしない

風が強い日や空気が乾燥しているときは、危険なのでたき火はやめる。また、たき火などを行う際は、事前に近くの消防署に届け出る。たき火の後は、水をかけるなどして完全に消火したことを確認する。

※県条例により10/1～11/10の期間中はたき火や野焼き等が禁止されています。

火山活動に伴う主な被害

● 火山ガス
火山ガスの成分は水蒸気だけでなく、二酸化硫黄や硫化水素といった物質も含まれています。
含まれている気体の種類によっては、人体に対して影響を与えるものもあり、過去には死亡事故も発生しています。

● 噴石
火山が噴火すると、大きな噴石が火口から吹き飛ばされることがあります。
大きさは直径約50cm以上のものもあり、風の影響をほとんど受けず短時間で落下し建物の屋根を突き破ることもあります。登山者の死傷や建造物の破壊といった被害につながることがあります。

● 火山灰
噴火によって噴出した直径2mm以下の小さな固形物です。
時には数100km以上も運ばれることがあり、広範囲に降下および蓄積します。火山灰は交通機関の乱れ、家屋の倒壊、航空機のエンジントラブル等様々な影響を与えます。

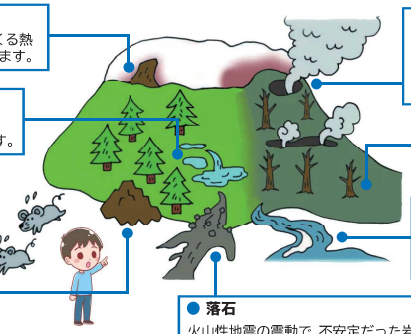
● 火砕流
高温の火山灰や岩、空気や水蒸気などが一体となって急速に山体を流下する現象です。
火砕流は通過した領域を焼失させたり埋没させたりすることがあり、破壊力が大きく恐ろしい現象です。流下速度は時速100km以上、温度は数100℃にも達します。

● 融雪型火山泥流
積雪時における火山において、噴火に伴って発生した火砕流等の熱によって斜面の雪が溶かされ、発生した水が周辺の土砂や岩石を巻き込み流下する現象です。
流下速度は時速60kmを超えることもあります。大規模な災害を引き起こしやすい火山現象で、広範囲の建物、道路、農耕地等が破壊され埋没することもあります。

● 火山泥流
火山堆積物が雨水等によって流れ下る現象で、土石流と類似の現象です。
噴石や火山灰が堆積しているところでは、数ミリ程度の雨でも発生しやすくなります。火山泥流は、高速で斜面を流れ下り、下流に大きな被害をもたらします。噴火後に雨が予想されるときは、川の近くや谷の出口に近づかないようにする必要があります。

● 溶岩流
マグマが火口から噴出して高温の液体のまま地表を流れる現象です。
通過域にある建物や道路や農耕地、さらには森林や集落をも焼失、埋没させてしまいます。
溶岩流の流下速度は比較的遅く基本的に人の足による避難が可能ですが流れる速度は溶岩の成分次第で変わるのでなるべく早く避難する必要があります。

こんなときは噴火の危険信号



● 雪が溶ける
マグマの上昇によって地中から伝わってくる熱が増すので、一部の雪が溶けることがあります。

● 温泉や湧水の異変
温泉の温度やわきだす量が急に変化したり、新たに温泉が出現したりすることがあります。

● 動物の異常行動
山に住む動物はさまざまな異常事態を感じて山から逃げ出してくることがあります。

● 地割れ
マグマの上昇に伴って山の形が一部が変わることがあります。地面にひび割れが出来たり、段差を生じたりします。

● 火山性地震
地下のマグマの動きに伴って火山とその周辺の限られたところで地震が起こることがあります。

● 噴気異常
マグマが上昇してくるとマグマの中に含まれる火山ガスが先に出てくるので、新しく火山ガスが出る場所ができたり、これまで出ていたガスの量が急にふえたりすることがあります。

● 植物が枯れる
マグマの上昇によって地中から伝わってくる熱が増すので、植物が枯れることがあります。

● 海水・湖水・河川水の異常
変色したり濁ったりすることがあります。また、湖水の水位が変化したり、魚が死んだりすることもあります。

● 落石
火山性地震の震動で、不安定だった岩がくずれ落ちてくることがあります。

● 鳴動・空振
山のほうから爆発音が聞こえたり、衝撃波が伝わってきてガラス窓の振動音が聞こえることがあります。

噴火が始まったら

避難するときはこんな服装で！

こんなことに注意して！

火山灰が降ってきたら

火山灰とは 火山灰とは、軽石や岩石が細かく砕かれたもので、直径2mm以下の岩片の総称です。木や紙などを燃やしてできる灰とは、成分も性質も根本的に異なります。

- 水に溶けることはありません。こすると、ガラスを傷つけることもあります。
- 火山灰は角が鋭くとがっています。目や肺に入ると、健康被害の原因になります。

火山灰が降ってきたら、次のことに注意

- **火山灰から目やのどを保護してください**
  外出時は、マスク・ゴーグルの着用や傘の使用、ハンカチなどで口元を覆う等、目やのどを保護してください。もし火山灰が目に入ってしまったら、こすらずに水で流しましょう。
- **灰を皮膚に触れさせない**
  皮膚が炎症を起こすことがありますので、直接触れることのないよう気をつけましょう。
- **交通事故に注意する**
  車や自転車などの運転では、降灰により視界不良になる恐れがあるため、ライトの点灯やワイパー(車)を使用し、運転に注意しましょう。また、滑りやすくなるため、スリップに注意しましょう。
- **灰を建物内に入れない**
  火山灰が入らないように窓を閉め、洗濯物は外に干さないようにしましょう。

噴火警戒レベル

予報警報	予　報	警　報		特別警報	
名　称	噴火予報	噴火警報（火口周辺）		噴火警報（居住地域）	
対象範囲	火口内等	火口周辺	火口から居住地域近くまで	居住地域及びそれより火口側	
レベル<キーワード>	1（活火山であることに留意）	2（火口周辺規制）	3（入山規制）	4（避難準備）	5（避難）
火山活動の状況	火山活動は静穏。火山活動の状態によって、火口内で火山灰の噴出等が見られる（この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ）。	火口周辺に影響を及ぼす（この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ）噴火が発生、あるいは発生すると予想される。	居住地域の近くまで重大な影響を及ぼす（この範囲に入った場合には生命に危険が及ぶ）噴火が発生、あるいは発生すると予想される。	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生すると予想される（可能性が高まっている）。	居住地域に重大な被害を及ぼす噴火が発生、あるいは切迫している状態にある。
住民等の行動及び登山者・入山者等への対応	状況に応じて火口内への立入規制等。	火口周辺への立入規制等。状況に応じて特定地域の避難準備等が必要。住民は通常の生活。	火口から居住地域近くまでの範囲への立入規制等。状況に応じて要配慮者の避難準備等、特定地域の避難等が必要。住民は通常の生活。	警戒が必要な居住地域での避難準備が必要。要配慮者及び特定地域の避難等が必要。	危険な居住地域からの避難等。